

基礎研 レポート

がんに関する知識と がん検診受診率・がんに関する備え

保険研究部 主任研究員 村松 容子
e-mail: yoko@nli-research.co.jp

1—はじめに

がんは老化の一種と言われており、長寿化にともない、がんと診断される人は増加している¹。およそ2人に1人が一生のうちのがんと診断され、3人に1人ががんで亡くなると推計されている。検査技術の発展による早期発見の増加や医療技術の進歩により、がん患者の生存率は向上しており、5年相対生存率は6割を超えている。また、がん治療における平均入院日数は短くなっており、通院しながら治療を受ける患者が増えていること等から、近年、がん治療を続けながら日常生活を送る人が増えている。

こういった状況を背景に、国では「がん対策推進基本計画」や「働き方改革実行計画」に基づき、がん検診受診の推奨や、治療と仕事の両立を社会的にサポートするための環境整備に取り組んでいる。しかし、二次予防として推進されているがん検診については、受診率は徐々に向上してきたものの国が目標としている50%には至っておらず、諸外国と比べても低い水準にとどまる。

そこで本稿では、人々は、がんについてどの程度の情報を知っているのか。知っている情報によって、がん検診の受診やがん罹患時の備えに違いはあるかについてニッセイ基礎研究所がおこなったアンケート調査の結果から紹介する。

2—がん検診の実態

厚生労働省は、がんの早期発見と、死亡率の低下を目的とする対策型がん検診として、以下5つを実施体制の整った機関で受けることを推奨している。

- ・ 子宮頸がん検診（細胞診）：20歳以上の女性 2年に1回

¹ がん対策推進企業アクションサイト「がん検診のススメ（新版） - がん患者の3人に1人は、バリバリの現役世代」
<https://www.gankenshin50.mhlw.go.jp/susume/2015/contents3.html>

※HPV 検査単独法が新たに追加。30 歳以上の女性 5 年に 1 回²

- ・ 乳がん検診（マンモグラフィ）：40 歳以上の女性 2 年に 1 回
- ・ 胃がん検診（内視鏡）：50 歳以上の男女 2 年に 1 回

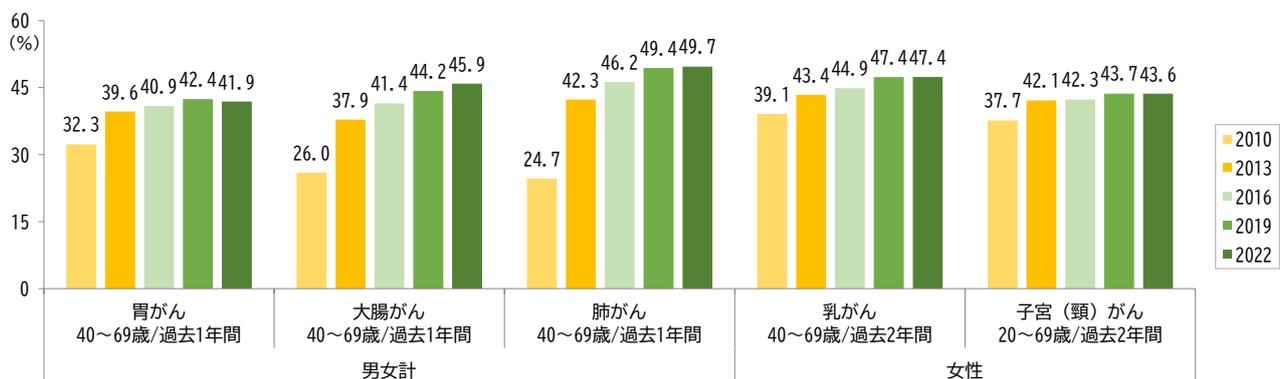
※胃部 X 線検査（バリウム検査）は 40 歳以上も可。年 1 回

- ・ 肺がん検診（胸部 X 線、高危険群で喀痰）：40 歳以上の男女 年 1 回
- ・ 大腸がん検診（便潜血）：40 歳以上の男女 年 1 回

第 3 期がん対策推進基本計画（2017～2022 年度）では、上記 5 つの検診について、検診受診率 50%とすることを目標としてきた。しかし、検診受診率は上昇傾向にはあるものの、いずれも 2022 年調査時点では目標に達していない（図表 1）。OECD の Health Statistics³によると、女性の乳がん検診（50～69 歳）と子宮頸がん検診（20～69 歳）は、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ等がおおむね 7 割以上を達成しており、日本のがん検診受診率は諸外国と比べても低い。

2023 年度から開始した第 4 期がん対策推進基本計画では、検診受診率の目標を 60%に引き上げ、引き続き推奨を行うことになっている。がん検診を受けない理由は受ける時間がないことや、費用負担が上位にくるが、がん検診を知らなかったことや、必要性を感じていないといった理由も多い。

図表 1 がん検診受診率



（資料）厚生労働省「国民生活基礎調査（各年）」

3—がんに関する情報の認知

1 | がんについて、どういう情報を知っているか

本稿では、人々は、がんをどのようにとらえているのか。知っている情報によって、がん検診の受診やがん罹患時の備えに違いはあるかについて紹介する。使用したのは、2021 年 6 月にニッセイ基礎研究所が実施した「がんの備えに対する意識調査」の結果である。本調査は、20～74 歳の男女個

² 厚生労働省が示す要件を満たす自治体に限り実施可能。HPV 検査が陽性かつ細胞診の結果が陰性の場合、1 年後に住民検診の枠組みで HPV 検査（追跡精検）が推奨される。

³ OECD サイト (<https://stats.oecd.org/index.aspx?queryid=30159>)

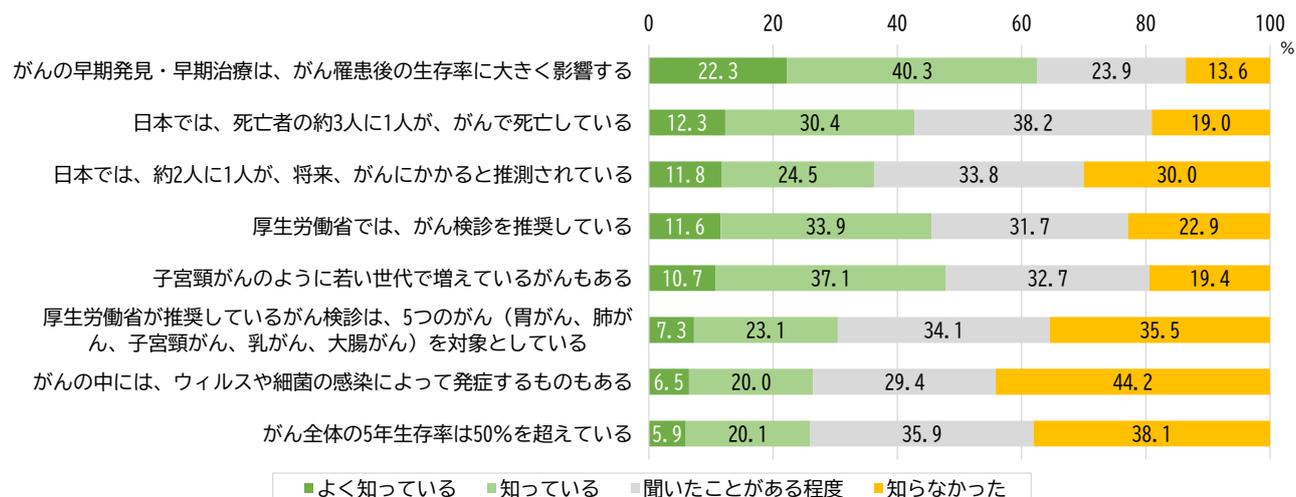
人を対象とするインターネット調査で、回収数は3,000である。

調査では、がんについて、いくつかの情報をあげて、それぞれについてどの程度知っているか「よく知っている」「知っている」「聞いたことがある程度」「知らなかった」から回答を得た（図表2）。

「よく知っている」の割合が高いのは「がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する」で、「よく知っている」が22.3%、「よく知っている」と「知っている」をあわせて半数を超えた。「よく知っている」の割合がもっとも低かったのは、「がん全体の5年生存率は50%を超えている（5.9%）」で、「知っている（20.1%）」をあわせても3割に満たない。「知らなかった」がもっとも高いのは「がん全体の5年生存率は50%を超えている（44.2%）」だった。

厚生労働省では、継続的にがん検診を推奨してきているが、それでも、「厚生労働省では、がん検診を推奨している」は「よく知っている」と「知っている」をあわせて半数弱にとどまる。さらに、「厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん（胃がん、肺がん、子宮頸がん、乳がん、大腸がん）を対象としている」は3割強にとどまっており、「がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する」という情報は比較的知られているものの、厚生労働省による二次予防としてのがん検診推奨については、十分には周知されていないと言えるだろう。

図表2 がんに関する情報の認知（※「よく知っている」が高い順）



（出典）ニッセイ基礎研究所「がんの備えに対する意識調査（2021年）」

性別と年齢群団別に、「よく知っている」または「知っている」と回答した割合をみると、それぞれの情報によってバラバラではあるものの、「日本では、約2人に1人が、将来、がんにかかると推測されている」等の男女年齢による差が比較的小さい情報もあれば、「がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する」「厚生労働省では、がん検診を推奨している」「厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん対象としている」「がん全体の5年生存率は50%を超えている」のように高年齢で高い情報もあった。一方、「子宮頸がんのように若い世代で増えているがんもある」は、特に若年女性で高い等、がんに関する情報の拡がりも多様であることが伺える（図表

3)。

一般に、「がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する」と「がん全体の5年生存率は50%を超えている」や、「日本では、約2人に1人が、将来、がんにかかる」と推測されている」と「日本では、死亡者の約3人に1人が、がんで死亡している」等は互いに相関が強そうであるが、今回の調査では「厚生労働省では、がん検診を推奨している」と「厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん対象としている」の相関がやや高かったものの、それ以外については情報間の認知の相関は低～中程度にとどまっており、個々の情報が単発的に認知されている様子がうかがえた。

図表3 性・年齢別がんに関する情報の認知：

「よく知っている」または「知っている」と回答した割合（※図表2の順）

	N	がんの早期発見・早期治療の影響が生存率に	がん全体の5年生存率は50%を超えている	日本では、約2人に1人が、将来、がんにかかる	日本では、死亡者の約3人に1人が、がんで死亡している	厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん対象としている	厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん対象としている	厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん対象としている	厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん対象としている	厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん対象としている
全体	3,000	62.6	42.7	36.2	45.5	47.8	30.4	26.5	26.0 %	
男性	1,500	57.2-	44.5+	35.1	39.5-	36.7-	25.6-	24.5-	26.3	
女性	1,500	67.9+	40.9-	37.3	51.5+	59.0+	35.2+	28.4+	25.7	
20~29歳	440	55.9-	50.2+	35.0	39.3-	54.5+	23.6-	25.9	24.3	
30~39	486	57.8-	41.4	30.7-	45.7	53.9+	25.7-	22.6-	18.3-	
40~49	633	60.0	41.2	34.9	42.2	47.9	27.5	29.1	22.7-	
50~59	577	62.9	39.7	36.9	43.7	44.0-	28.4	26.3	25.0	
60~69	544	67.3+	41.7	41.0+	48.3	41.4-	36.6+	26.7	31.3+	
70~74	320	75.3+	44.7	39.7	58.4+	47.2	45.6+	27.8	39.4+	

(注) 全体と比べて高い数値に± (5%有意水準)

(出典) ニッセイ基礎研究所「がんの備えに対する意識調査 (2021年)」

2 | 認知する情報とがん検診受診率

つづいて、がんに関する上記情報の認知と、2年以内⁴に、5つの部位についてがん検診を受けたかどうかを部位ごとに線形確率モデルで推計した。説明変数は、がんを怖いと思うかどうか（「こわい」「どちらかと言えばこわい」を1、「どちらかと言えばこわくない」「こわくない」「わからない」を0とするダミー変数）と、上記8つの質問についての認知状況（「よく知っている」を4、「知っている」を3、「聞いたことがある程度」を2、「知らなかった」を1）とした。性、年齢、未既婚、職業、同居家族の有無、健康状態を調整した。

その結果、「日本では、死亡者の約3人に1人が、がんで死亡している」を認知しているほど、大腸がん、肺がん、子宮頸がん、「がん全体の5年生存率は50%を超えている」を認知しているほど、

⁴ 既述のとおり、厚生労働省では大腸、肺について年に1回、胃、乳房、子宮頸部について2年に1回受けることを推奨しているが、本調査は自治体によるがん検診が始まるタイミングである6月に行った調査であることや、記憶に基づいて回答を行っている人が多いと考えられることから、2年以内に受けている人を「がん検診を受けた」と考えた。

乳がん、子宮頸がんの検診は受けていない。また、「日本では、約2人に1人が、将来、がんにかかる」と推測されている」を認知しているほど、大腸がん、肺がん、「子宮頸がんのように若い世代で増えているがんもある」を認知しているほど、子宮頸がん、「がんの中には、ウイルスや細菌の感染によって発症するものもある」を認知しているほど、胃がん、「厚生労働省では、がん検診を推奨している」を認知しているほど大腸がん、肺がん、子宮頸がん、「がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する」を認知しているほど、胃がん、大腸がん、肺がん、乳がんの検診をそれぞれ受けていた。

多くの情報については、知っているほど検診を受けている傾向があるが、今回「日本では、死亡者の約3人に1人が、がんで死亡している」と「がん全体の5年生存率は50%を超えている」は、知っているほど、いくつかの部位について検診を受けていない傾向が見られた。この2つの情報については、「よく知っている」と回答をした人は、他の情報と同様に、がんを「こわいと思っている」と回答した割合が9割近くと圧倒的に多かったが、「こわいと思っていない」と回答している割合も全体と比べて高いことから、がんだけを特別こわい病気として捉えていない人が含まれる可能性が考えられた（図表5）。

図表4 がんに関する情報の認知とがん検診受診

	胃がん	大腸がん	肺がん	乳がん	子宮頸がん
がん怖いと思うか 1（こわい、どちらかと言えばこわい） 0（どちらかと言えばこわくない、こわくない、わからない）	0.0927*** (0.0234)	0.0813*** (0.0221)	0.0766*** (0.0229)	0.1519*** (0.0378)	0.1269** (0.0397)
4（よく知っている情報）					
1（知らなかった）					
日本では、死亡者の約3人に1人が、がんで死亡している	-0.0125 (0.0146)	-0.0437** (0.0142)	-0.0340* (0.0144)	-0.0316 (0.0219)	-0.0548* (0.0218)
日本では、約2人に1人が、将来、がんにかかると推測されている	0.0215 (0.0143)	0.0615*** (0.0139)	0.0388** (0.0142)	0.0406 (0.0215)	0.0258 (0.0213)
子宮頸がんのように若い世代で増えているがんもある	0.0209 (0.0139)	0.0200 (0.0137)	0.0200 (0.0139)	0.0377 (0.0224)	0.0775*** (0.0222)
がんの中には、ウイルスや細菌の感染によって発症するものもある	0.0319* (0.0126)	0.0098 (0.0123)	0.0083 (0.0125)	-0.0021 (0.0187)	0.0344 (0.0185)
厚生労働省では、がん検診を推奨している	0.0170 (0.0148)	0.0282* (0.0139)	0.0297* (0.0142)	0.0365 (0.0233)	0.0560* (0.0240)
厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん（胃がん、肺がん、子宮頸がん、乳がん、大腸がん）を対象としている	0.0206 (0.0145)	0.0170 (0.0144)	0.0108 (0.0144)	0.0111 (0.0219)	-0.0066 (0.0218)
がん全体の5年生存率は50%を超えている	-0.0140 (0.0142)	-0.0185 (0.0137)	-0.0083 (0.0139)	-0.0531** (0.0203)	-0.0431* (0.0206)
がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する	0.0326* (0.0136)	0.0335** (0.0127)	0.0456*** (0.0130)	0.0591** (0.0219)	0.0255 (0.0228)
N	3,000	3,000	3,000	1,500	1,500
調整済決定係数	0.154	0.123	0.154	0.082	0.102

- (注1) 性、年齢、未既婚、職業、同居家族の有無、健康状態を調整
(注2) * p<0.05, ** p<0.01, ***p<0.001
(注3) () は頑健な標準誤差
(注4) 質問間の相関は中程度（VIFは1~2程度）で、多重共線性はないと考えた
(注5) 乳がん、子宮頸がんについては、女性のみを対象とした
(出典) ニッセイ基礎研究所「がんの備えに対する意識調査（2021年）」

その結果、がんに関する情報の認知との関係を見ると、「日本では、死亡者の約3人に1人が、がんで死亡している」「子宮頸がんのように若い世代で増えているがんもある」「厚生労働省では、がん検診を推奨している」「がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する」を認知しているほど、重要だと回答し、「がん全体の5年生存率は50%を超えている」を認知しているほど、重要ではないと回答していた。

図表7 がんに関する情報の認知とがんに対する備えについての考え方

	重要だと思う
がん怖いと思うか 1 (こわい、どちらかと言えばこわい) 0 (どちらかと言えばこわくない、こわくない、わからない)	0.9368*** (0.0634)
4 が へんに よく 関 知 っ て い る 情 報 () 1 (知 ら な か っ た)	0.0526* (0.0260)
日本では、死亡者の約3人に1人が、がんで死亡している	0.0400 (0.0247)
日本では、約2人に1人が、将来、がんにかかると推測されている	0.0951*** (0.0254)
子宮頸がんのように若い世代で増えているがんもある	-0.0450 (0.0212)
がんの中には、ウィルスや細菌の感染によって発症するものもある	0.0691** (0.0251)
厚生労働省では、がん検診を推奨している	-0.0410 (0.0233)
厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん(胃がん、肺がん、子宮頸がん、乳がん、大腸がん)を対象としている	-0.0497* (0.0231)
がん全体の5年生存率は50%を超えている	0.1650*** (0.0257)
がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する	
N	3,000
調整済決定係数	0.212

(注1) 性、年齢、未既婚、職業、同居家族の有無、健康状態を調整

(注2) * p<0.05, ** p<0.01, ***p<0.001

(注3) ()は頑健な標準誤差

(注4) 質問間の相関は中程度(VIFは1~2程度)で、多重共線性はないと考えた

(出典) ニッセイ基礎研究所「がんの備えに対する意識調査(2021年)」

「がん全体の5年生存率は50%を超えている」を知っている人では、がん検診受診率も低かったが、がんが怖いと思う人も相対的に少ないだけでなく、がんに対する備えの面でも相対的に重要ではないと考える傾向がみられ、がんを特別な病気と捉えていない可能性が考えられる。

4—おわりに

がんに関する情報について、どの程度知っているか尋ねた結果、今回の質問の中では、「よく知っている」または「知っている」と回答した割合は、「がんの早期発見・早期治療は、がん罹患後の生存率に大きく影響する」が最も高く、62.6%だった。「厚生労働省では、がん検診を推奨している」は45.5%と半数に満たない。さらに、「厚生労働省が推奨しているがん検診は、5つのがん対象としている」は3割程度と低くなっていた。国が早期発見、早期治療を目指してがん検診を推奨していることや、検診を推奨する5つのがんについて、検診を比較的安価に受けられることを周知し続けることが必要だろう。

多くの情報については、知っているほど検診を受けている傾向があるが、今回「日本では、死亡者の約3人に1人が、がんで死亡している」と「がん全体の5年生存率は50%を超えている」は、知っているほど、いくつかの部位について検診を受けていない傾向が見られた。これらの情報は「よく

知っている」で、がんをこわいと思う気持ちが少ない人もいた。また、多くの情報については、認知しているほど、がんに対する備えを重要だと回答していた。しかし、「がん全体の5年生存率は50%を超えている」は、認知している人ほど、がんへの備えを重要視していない傾向があった。

がんに関する各情報は、それぞれの情報が単発的に認知されている様子うかがえたことを踏まえて、がん検診の普及を図る観点からは、「がん全体の5年生存率は50%を超えている」については、その背景にがん検診受診率の向上にともなう早期発見の増加や医療技術の進歩があることをあわせて伝えたり、生存率が高くなったからこそ、治療しながら日常生活を送ることを踏まえた準備をする必要性を伝えていく必要があるだろう。